

道徳の基礎づけの問題に関する一考察

——カント道徳の形式主義の理論的根拠について

政策・メディア研究科修士一年 清水瑛子

今年度は、しばしば「形式主義」であることを理由に批判されるカント道徳が形式主義であらざるを得ないこと(形式と質料の区別をした上で形式に優越性を認めざるを得ないこと)の理論的根拠を探究するため、カントの認識論の主要著作である『純粹理性批判』の中の「形式」と「質料」に関する記述を参照しながら、カントによる諸概念の定義とそれらの定義の根拠の一部を明らかにした。

カントは、『純粹理性批判』(B322-323, B645-646)の中でライプニッツ、かつての論理学者、及び古代の哲学者による「形式」と「質料」の定義と位置付けを批判している。これらの批判の中でカントは、カント以前の哲学者による「質料」の優遇の問題点を指摘すると同時に、「形式」の「質料」に対する優越を主張するカント自身の立場とその根拠を明らかにしている。該当箇所の議論を参照し、内容を整理することによって得られた知見は以下の通りである。

1.カントは、ライプニッツ及びかつての論理学者たちとは反対に、認識において「形式」が「質料」に先行すると考えている。ここで

言われる「先行」は、時間ではなく¹⁾、可能性の条件に関わるものである。カントは、形式の(それだけで与えられており、先行する質料を必要としない、つまり質料に依存しないという)独立性と、質料の(形式を与えられたものとして前提するという)依存性を指摘している。

2.カントが形式の質料に対する優越を主張する根拠は、私たちの認識の対象が「物自体」ではなく「現象」であることである。もし、私たちが純粹悟性によって直接に物自体にアクセスすることができ、時間と空間が物自体の規定であるとすれば、質料は形式に先立つと言えるであろう。ところが実際には、私たちは純粹悟性をもっても私たち(人間)の感性の規定を超えることはできず、感性の形式としての時間と空間を通してしか質料を受けとることはできない、とカントは指摘する。つまり、私たちは直接物自体にアクセスすることができず、形式(主観的性状)を通してしか(それ自体として何であるかは私たちにわからないものである)質料を受けとる

¹⁾ 「先行」が時間的先行を指していないことは、当該箇所の記述のみならず、『純粹理性批判』序論冒頭の以下の記述からも明らかである。「(.....)時間にかんしていえば、だから私たちのうちに生じるどのような認識も経験に先立つことはなく、経験とともにいつさいの認識ははじまる。私たちの認識がすべて経験とともに開始されるからといって、認識はそれゆえにことごとく経験から生じるというわけではない。それというのも、つぎのようなしだいもありえようからである。つまり、私たちの経験認識すらも、印象をつうじて受けとるものと、私たち自身の認識能力が(感性的な印象によってたんに誘発されて)じぶん自身から提供するものがひとつに合成されたものであろう、ということである。認識能力がこのように付けくわえるものを前者の根本的素材から区別することは、長い訓練を積んでそのくわえられたものに気づき、それを分離することに熟達するようになって、はじめてなしうることがらなのだ。」(B1-2、強調カント)ここでカントは時間の問題と起源の問題を明確に区別している。「認識能力が付けくわえるもの(was unser eigenes Erkenntnisvermögen (...) aus sich selbst hergibt)」をアプリオリな形式として、「根本的素材(Grundstoffe)」を常にアポステリオリである質料として捉えれば、前者が後者の与えられる経験と時間的には同時に発動することが可能であることがわかる。

ことができない、という有限性を捉えている²がゆえに、カントは、私たちの認識においては「形式」が「質料」に先行せざるを得ないと考えるのである。

3. 私たちが現に持っている形式の外に出て物事を認識することは不可能である。このような意味において、私たちにとっては(「人間」を不当に超えることをせずに思考する限り)、「形式」こそが根源的で必然的である。「質料」の方を根源的で必然的であるとする古代の哲学者たちの考えは、超越的なものとして退けられなければならない。カントは、このように述べ、形式の根源性、必然性を指摘している。

参考文献

『純粋理性批判』熊野純彦訳、作品社、2012年。

² たしかに、カントが批判の対象としている哲学者たちもある意味においては人間の認識の有限性を考えていたと言えるであろう。しかし、純粋悟性によって物自体にアクセスできるという考えの中では、物自体は感性による妨害を正確に取り除きさえすれば到達することのできるものとして示されている。このような考えにおける有限性は、感性的なものを排除することによって捨象することができる、「捨象可能な有限性」であると考えられる。これに対して、カントは(少なくともある意味においては)捨象すること、乗り越えることのできない有限性を捉えているようである。また、この差異は、カント以前の哲学における「物自体」がカント哲学における「物自体」と厳密には異なっていることをも示唆していると考えられるのではないだろうか。